

# **FIELD NOTE**

**no.169**



**WILDLIFE  
MANAGEMENT  
OFFICE**

**2026.1**

# 目次

FIELD NOTE 2026年1月号 No.169

- 
- 
- 1 「不確実な時代の最前線で」  
—新たな「人と野生動物の関係」を創造するために— 奥村 忠誠
- 
- 3 福島県の“けもの”関係者を繋ぐ  
けものネットワークふくしま 2025年度交流会報告 鉄谷 龍之、佐藤 洋司
- 
- 7 小笠原の果てしなき外来種との戦い  
～ありんこから大木まで～ 岸本 真弓
- 
- 15 本州のシカ捕獲事業における銅弾の即倒性能評価  
—7年前の「業務で使う最適なライフル銃」への回答— 瀬戸 隆之
- 
- 19 「身近な隣人」になっていたクマについて 久門 美月
- 
- 23 新人紹介 松木 一幸
- 
- 24 WMO活動報告 2025年10月～12月
- 

表紙の絵 山崎 稜平

---

---

## 表紙の絵

学生の頃に研究対象としていたニホンアナグマを描いてみました。モデルは大哺乳類展3で出会ったアナグマの剥製。興味津々にこちらに視線と鼻を向ける、野生動物らしからぬ「ふてぶてしさ」が愛らしく、アナグマの魅力のひとつとして表現できたらと取り組みました。

山崎 稜平

(ワイルドライフマネジメント事業部 関東支社)

## 「不確実な時代の最前線で」

### —新たな「人と野生動物の関係」を創造するために—

1. はじめに——昨年の出来事に思いを致し、迎えた新春

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、平素より弊社の活動に対し、多大なるご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。新しい年を迎え、私たちは改めて襟を正し、我々に課せられた社会的使命の重さを再確認しなければなりません。昨年の出来事は、これからの日本の野生動物保護管理のあり方を問い直す、一つの転換点であったと私は捉えています。

昨年、私たちの記憶に強く刻まれたのは、全国各地で相次いだ「クマの市街地出没」でした。市街地への出没と人身被害、そして連日報道されるこれまであまり目にしたことのないような現場の映像。それは、長年この分野に携わってきた私たちにとっても、これまでの経験だけでは理解できないものもありました。令和5年度のクマによる人身被害が当時の過去最多となったことなどを受け、人の日常生活圏に出没した危険鳥獣への迅速な対応を可能とするため、鳥獣保護管理法が昨年9月に施行され、実際に複数の自治体で制度に基づいた捕獲が行われました。しかし、この緊急銃猟は市町村長の判断により行われることや安全管理のためにも実行体制の検討が事前に必要であるため出没を想定した訓練が必要であり、弊社としても複数の市町村の訓練業務に関わらせてもらいました。このような市街地出没が毎年同じ程度で発生するとは限りませんが、私の中ではこれまでのクマの動きとは違うものを感じた一年でもありました。

2. 「常識」の崩壊——クマは変わったのか

私はこれまで、野生動物保護管理の専門家として、あるいは現場を知る実務家として、同じ場所であれば「動物の基本的な生態や行動様式というものは、

人による積極的な介入がない限り経年的にそうそう大きく変わるものではない」という認識を持っていました。しかし、昨年のクマの出没状況は、私が知る従来のクマの生態や行動パターンに照らし合わせて、理解しがたいものでした。これまで出没しなかった場所への進出、人を恐れない行動を目の当たりにし、私はもう一度クマの行動の変化ではなく環境の変化に立ち返る必要がありました。変わったのは、おそらく彼らを取り巻く「環境」と、私たち「人間社会」の方なのではないかと。

過去の生物多様性国家戦略において、日本の自然環境における危機の一つとして「里山の崩壊」が指摘されてきました。かつて、人の生活圏と奥山の間には、手入れされた里山という「緩衝地帯（バッファゾーン）」が存在していました。しかし、近年では地方の過疎化と高齢化に伴い、里山は放置され、藪化し、その境界線は消失しました。また、放置された里山にはカキやクリの木が残っていて、クマをはじめとする野生動物にとっていい餌となっているのは事実です。

昨年の出来事は、長年危惧されてきたこの「人と野生動物の境界線の消失」が、いよいよ限界点を超え、現実の脅威として噴出した結果であると考えべきなのかもしれません。里山地域の人口減少や土地利用の変化は、一朝一夕に解決するものではなく、今後も進行していきます。つまり、私たちは今、「過去のデータや経験則が通用しない、予測困難な変化が常態化する時代」に突入したといえます。これまでの常識が通用しない以上、私たちのアプローチもまた、根本的なアップデートを迫られます。

3. 錯綜する情報の中で——現場を知る者の責務

こうした構造的な変化の中で、私が強い危機感を抱いたもう一つの点が「情報の扱い方」です。昨年のクマ報道を振り返ると、センセーショナルな被害

状況ばかりが強調され、科学的根拠に乏しい憶測や、極端な駆除論・保護論が交錯していました。社会全体が不安に包まれる中で、正しい知識や、地域の実情に即した適切な対応方法が十分に伝わっていない。そのもどかしさを、現場に近いところで活動する私たちは痛感しました。

現場を知らないコメンテーターの言葉ではなく、泥臭く山に入り、痕跡を追い、地域住民の声を聞いてきた私たちこそが、発信すべき「真実」を持っています。クマに限らず野生動物に対して、「正しく恐れ、正しく守る」ための知識を社会に浸透させることは、これからの私たちにとって、調査・管理業務と同等、あるいはそれ以上に重要な責務となります。不安を煽るのではなく、データを元に具体的な解決策を提示する。今後は、これまでと同様にデータに基づいて現場の状況を理解することに加えて、正しい情報を発信することにも意識して取り組んでいきたいと考えています。

#### 4. 本年の指針——地域全体で「行政委託」を超えた課題解決へ

まずは昨年のクマの市街地出没への対応が今年から本格的に始まるという認識でいますので、昨年の緊急対応という「対症療法」から、本年は「根治治療」に向けた土台作りの年になると思います。その部分にはこれまで培った技術力や経験を生かして、科学的根拠に基づいた管理計画の策定に寄与していきたいと考えています。当然ですが、他の獣種への取り組みもこれまでと同様に継続し深化を目指します。

また、これまで私たちの業務は、行政からの委託事業が中心でした。しかし、野生動物の問題がこれほどまでに複雑化・社会問題化した今、野生動物問題はもはや行政だけの課題ではなく、地域コミュニティ全体に関わる「地域課題」であると捉えています。したがって一昨年度組織した地域支援室を中心に、地域の多様なステークホルダー（利害関係者）と連携し、地域全体で問題を解決する枠組み作りを目指します。さらには、受託事業にとどまらず自主事業にも力を入れていきたいと考えています。野生動物問題に関して、自ら社会に問いかけ、人々を巻き込んでいける組織を目指したいと考えています。

#### 5. 職員への期待——「俯瞰する眼」と「機微を捉える感性」

最後に、共に働く社員の皆さんに期待することを述べます。先述の通り、私たちは今、予測の難しい変化の中にいます。マニュアル通りの対応が正解とは限らない場面に、これからも数多く遭遇するでしょう。そのような中で皆さんに求められるのは、相反する二つの視点を同時に持つことです。

一つは、社会全体の動向、国の政策、気候変動や生態系の推移といった、物事を高い視点から大局的に見る「俯瞰（ふかん）する眼」です。今、目の前で起きている事象が、大きな流れの中でどのような意味を持つのかを考える力です。もう一つは、現場の空気感、動物の行動、地域住民の生活、そういった細かな変化を感じ取る「機微を捉える感性」です。俯瞰して地図を描きながら、現場の機微を捉えて地域にあった提案をする。この両輪があって初めて、複雑な野生動物問題に対して適切な取り組みを実施することができます。決して容易なことではありませんが、現場の最前線にいる皆さんにしかできないことです。社会の変化に柔軟に対応しつつも、芯の部分では「人と野生動物の適切な関係性を目指す」という熱意を絶やさないでいただきたい。その情熱こそが、私たちの組織の最大の資産であり、社会からの信頼の源泉です。

#### 6. 結びに

「里山」というかつての緩衝地帯が機能を失いつつある今、私たちは人と野生動物の新しい関係性を築いていかなければなりません。私たちも微力ながら貢献し、持続可能な社会への道筋を作りたいと思います。変化を恐れず、むしろこの変化を、組織として、そして社会全体として成長するための好機と捉え、全力を尽くしてまいります。本年が、皆様にとって実り多き一年となりますことを心より祈念し、年頭の挨拶といたします。

令和8年 元旦

株式会社野生動物保護管理事務所  
代表 奥村 忠誠

# 福島県の“けもの”関係者を繋ぐ

## けものネットワークふくしま 2025 年度交流会報告

鉄谷 龍之<sup>1</sup>、佐藤 洋司<sup>2</sup>

(1. ワイルドライフマネジメント事業部 福島事業所、2. けものネットワークふくしま代表)

2025 年 12 月 6 日に、「けものネットワークふくしま」(以下、けもネット) 2025 年度交流会が開催されました。本稿では、代表である佐藤と、初開催である 2022 年度から参加者として、2025 年度はスタッフとして参加した鉄谷から、けもネットと交流会について紹介します。

まず、佐藤から発足の経緯を紹介し、次に、鉄谷からけもネットの概要と 2025 年度交流会について報告します。最後に、佐藤から今後の活動について述べます。

### ■ けもネット発足の経緯

「けものネットワークふくしま」代表の佐藤と申します。実は私は 1990 年前後に、2 年間野生動物保護管理事務所(WMO)に在籍していましたが、フィールドノートに執筆するのは初めてで、感慨深く思っています。WMO と言えば、先日ある学会で在籍中同僚だった白井さんに会え、いろんな意味でお変わりなかったことにびっくり…、いや、うれしく思ったところです。

さて、けもネットは福島県内で野生動物、特に哺乳類に関して活動している方をゆるく繋いで情報交換を行うという目的で、2022 年に発足しました。私からはそれまでの経緯を少し紹介したいと思います。

福島県内では 1990 年代から野生動物に関わる方々の活動が活発になってきました。主なところでは、鳥獣被害対策、レッドデータブック策定、傷病鳥獣の保護・リハビリ、市町村史における生息状況調査などです。さらに 2011 年の東日本大

震災と原発事故後には、多くの研究機関が事故の影響を調査するため様々な活動を行ってきました。

この中で特筆すべきなのが、「福島サルの会」の活動です。この会は、果樹地帯である福島市周辺地域のニホンザルの被害対策を進めるため、会の事務局の呼びかけにより集まった有志が、福島市や農協の支援を受けつつ、発信器装着群を中心にカウント調査を行う、任意団体でした。毎年 12 月に 2 週間ほどの調査期間が設定され、それぞれ参加可能な日に、県内の野生動物関係者が一堂に集まりましたが、会員以外にも広く呼び掛けたため、東京の専門学校からの学生なども多数参加していました。2 週間の中でも特に人数が多く集まる夜は、大宴会だけでなく参加者の一部から活動発表も行われ、県内野生動物関係者の一大イベントとして位置づけられていました。残念ながら現在、福島市や農協のサル対策の取り組み方針の変化や、中心となっていた農協職員が転職したことなどから、福島サルの会の活動は休止しています。鳥獣被害対策については現在市町村の一部に配置されている福島県鳥獣被害対策市町村専門職員(多くは非正規職員)を中心に行われています。

福島サルの会の活動がなくなるとともに、県内の野生動物関係者が集まる機会がなくなり、それぞれ個別に活動するようになりました。この中で福島県鳥獣被害対策市町村専門職員は、まだ経験も少なく役場の中には相談できる方もほとんどいないという現状でした。他の活動についても、県内の野生動物の動き、それに関わる人の動きなど、情報交換の必要性が求められてきました。野生動

物関係者というのは、一般社会の中で野生動物について自由に意見交換できる場が少なく、そのような場を作って、ついでに楽しい酒飲みをしたいという思いが私にはありました。同じ思いを持っていただければわかりませんが、サル会活動に参加していた者の中から、情報交換をするネットワークを作らしましょうという声が上がリ、けもネットが設置された次第です。

現在のけもネットの活動、交流会の様子については、鉄谷さんから紹介したいと思います。

### ■ けもネットと交流会

けもネットは、「鳥獣被害対策の活動、原発事故による影響調査、レッドリストに関する調査、傷病鳥獣保護活動、観察会による普及啓発活動など、福島県内で野生動物（哺乳類）について活動している“けもの関係者”のつながりを創出し、円滑な連携を図ること」を目的としています。要するに、どのような分野であれ、福島県の野生動物関係者を繋げ、情報交換していこうという団体です。

現在の主な活動内容は、交流会の開催、メーリングリストによる県内イベントについての情報発信や会員同士の情報交換です。

交流会は、年1回、毎回テーマが設定され、開催されます。各回のテーマ等を表1に示しました。各回のテーマは、参加者アンケート等を参考に検討されますが、内容はけもネット自体の目的である“繋がり”を意識したものとなっています。参加者の所属としては、福島県の行政職員や研究者、市町村からは地域おこし協力隊が多くなっています。また、県内で野生動物調査等を行う民間企業、その他団体は、NPO法人や財団法人であり、調査等を行う団体や自然関連施設の管理を行っている団体も参加してくれています。大学からは、研究者や学生の参加があります。

毎回、様々な発表、パネルディスカッション、ワークショップが行われ、“ふくしまのけもの”に多様な関わり方をしている人々が集まり、意見交換を行い、交流を深めています。なお、最後には必ず懇親会が開かれ、夜中まで交流が続きます。

表1. 交流会の概要

開催日	テーマ	開催地	参加人数
2023/2/18	けものネットワークふくしま はじめの一步	伊達市	43
2023/12/9	社会構造の変化と野生動物 ～どうなる?! “ひと”と“けもの”の陣取り合戦～	福島市	44
2024/9/28	普及啓発	川俣町	20
2025/12/6	薄い繋がりを濃くする、無い繋がりを創出する	三春町	26

表2. 所属別の参加者数

所属	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	延べ数
福島県	11	10	3	7	31
市町村	12	5	2	2	21
民間企業	8	7	5	4	24
その他団体	8	11	5	10	34
大学	4	10	5	3	22
国	0	1	0	0	1
合計	43	44	20	26	133

## ■ 2025 年度交流会

4 回目となった 2025 年度の交流会は、「薄い繋がりを濃くする、無い繋がりを創出する」をテーマとして、開催され、26 名の参加がありました。けもネットの目的に立ち返るテーマ設定であり、いつもに増して内容も交流に重きが置かれました（表 3）。

開会挨拶の後に行われた参加者の自己紹介は、1 人 3 分と長めの時間が設定され、それぞれがどのように“ふくしまのけも”と関わっているか等が話されました。昼休憩を挟み、午後は、話題提供とワークショップが行われました。

話題提供は、その後のワークショップに向け、参加者の前提となる知識を揃えるために、各種の基本的な生態や、分布等の生息状況がどの程度把握されているか等が紹介されました（図 1）。話題提供者は、スタッフである千本木からツキノワグマ、鉄谷からアライグマ・アメリカミンクについて、さらにアクアマリンふくしまの荒木氏に加わっていただき、福島県内のカヤネズミの生息状況について、お話いただきました。

ワークショップのテーマは「野生動物の生息状

況を把握する」とし、班ごとにツキノワグマ、アライグマ、カヤネズミの生息状況を把握するために、どのような方法があるか、どのようなことができるかを話し合いました。しかし、今回のワークショップの目的は、テーマの答えを出すことなく、できるだけ多くの参加者と交流を持つことです。そのため、ワールドカフェという方法で行われました。ワールドカフェを簡単に紹介すると、1) 班ごとにカフェホストを決める、2) 意見を出し合う、3) カフェホスト以外の人は班を移動する、4) カフェホストは移動してきた人に前回までに出た意見を説明する。この 2~4 を複数回繰り返し、最後に結果を共有する方法です。また、班を移動する際は、できるだけ違う班に入るようにします。この方法により、班のメンバーが固定されたワークショップより、多くの人と意見交換ができました。

個人的な感想としては、自己紹介に長く時間をとったこと、普段関わりのないカヤネズミの話が聞いたことがとても印象に残っています。開催後の参加者アンケートを見ても、自己紹介やワークショップの評価は高く、一方で、フリートークの

表 3. 2025 年度交流会の内容

時間	内容
10:30~10:40	開会あいさつ（けもネット代表：佐藤洋司）
10:40~12:00	参加者自己紹介（1 人 3 分程度）
12:00~13:00	昼休憩
13:00~13:45	話題提供 <ul style="list-style-type: none"> <li>● クマの分布について （株式会社 BOULDER：千本木洋佑）</li> <li>● アライグマ等の生息状況について （株式会社野生動物保護管理事務所：鉄谷龍之）</li> <li>● カヤネズミの生息状況について （アクアマリンふくしま：荒木美紀 氏）</li> </ul>
13:45~16:45	ワークショップ「野生動物の生息状況を把握する」
16:45~17:00	総括・閉会（けもネット代表：佐藤洋司）
18:30~21:00	懇親会



図1. 話題提供：カヤネズミの生息状況について



図2. ワークショップの結果発表



図3. けもネット代表による挨拶

時間が欲しい等の要望がありました。この要望への対応は、次回以降の検討になると思いますが、このような意見があるということは、けもネットの目的と参加者の要望が一致していると考えられ、次回開催の励みになると感じました。

#### ■今後の活動について

けもネットは法人でも何でもない任意団体です。会費も集めているわけではありません。イベントごとに必要経費を集めていますが、現在は交流会が年1回行われるイベントです。この交流会の参加は会員以外にも広く呼び掛けています。おかげさまで学生や社会人の若い方の参加も毎年一定数います。

昨年は学生が行う巣箱調査に協力する活動も始まりましたが、代表の私としては、サルのカウント調査のような大掛かりなフィールドワークに会として関わることで、野生動物関係者の育成、調査技術の伝承、おいしい酒飲みができないかと考えています。

会員は福島県内の野生動物に関心のある方なら誰でも入ることが可能です。正直、入ったからといって特に大きなメリットもないのですが、県内の野生動物関係の情報を集めやすい、会員が行う調査に参加することができるなどがメリットになります。来年度の交流会に向けての準備も始まりました。興味のある方は、是非一度交流会に参加してください。

けもネット連絡先

kemonet.fukushima@gmail.com

# 小笠原の果てしなき外来種との戦い

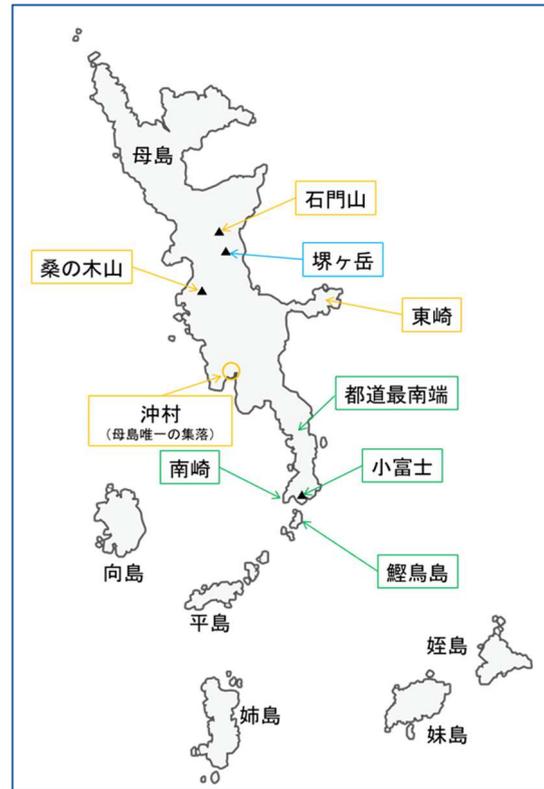
～ありんこから大木まで～

岸本 真弓（もりの研究所）

小笠原といえば、ポニブルーと呼ばれる明るくて深い藍色の海とアホウドリ、そして残念ながら外来種。哺乳類の仕事をしてきた私にとって、小笠原の外来種といえば、ヤギ、ネコ、ドブネズミ、グリーンアノールがすぐに思い浮かぶ。しかし、現地に行って知ったのは、想像をはるかにこえる外来種の種数の多さと、定着分布の深さ、そしてそれと戦う人々の果てしない道のりだった。

小笠原諸島は、固有種の割合が高いこと、また特に陸産貝類（カタツムリの仲間）や植物において、進化の過程がわかる貴重な証拠が残されていることが高く評価され、2011（H23）年に世界自然遺産に登録された。小笠原諸島社会の中心的役割を担うのが東京から約1,000kmの父島。そこから南へ50kmに、もうひとつの有人島である母島がある。母島の方が貴重な固有動植物が多く残されていることから、今回母島訪問を楽しみにしていた。

小笠原に行くには6日単位で東京と小笠原を結び航海している小笠原丸を使う。私は2025年9月7日11時に東京を出発して、翌8日11時に小笠原に到着し、9月17日15時に小笠原を出て翌18日15時に東京に戻った。つまり、2航海分、9泊10日間小笠原に滞在。前半は小笠原訪問のきっかけとなった大学院時代の後輩が指導する大学生の卒論研究のためのグリーンアノール調査に参加。彼らが東京へ戻った11日以降は観光で小笠原を堪能した。13日には母島（人口約400人）に渡り、そこでガイドさんに2日間山を案内していただいた。



母島列島の概要と訪問場所等

私を案内してくださったのは irie isle (アイリーアイル「素晴らしい、心地いい、楽しい島」という意味らしい)のネイチャーガイドMさん。初日は1日コースの南崎・小富士を案内していただき、2日目は半日コースの塚ヶ岳に行った。(母島で最も有名な“石門”は土砂崩れで通行止め)。小笠原の自然についてはもちろんのこと、歴史や人々の暮らし、ものの名前の謂れなどにも詳しく、私の外的な質問にも丁寧に答えてくださり、歩く際には細かにご配慮いただいて、ほんとうに楽しくまた大変勉強になった2日間だった。もう一度行く機会があれば、またこの方にガイドしていただ

きたいと思っているくらい。本当にたくさん  
のことを教えていただいたのだが、歩きながらのメモ  
はずさんで、これくらいは覚えていられると思っ  
たこともやっぱり忘れてしまって、大変不十分で  
はあるが、この2日間に私が受けた感動と驚きをお  
伝えしたいと思う。

13日9時半、母島丸で母島に到着し、迎えに  
来てくださったMさんに連れられ都道最南端の標  
識から、小富士・南崎へのトレッキング道に入る  
(写真1)。階段を少し下ると、種子やニューギ  
ニアヤリガタリクズムシ(陸生プラナリアの一種。  
以下、「プラナリア」)などの持ち込みなどを防ぐ  
ため設備(マット、粘着コロコロ、酢スプレー)  
がある(写真2)。

少し歩いて最初にであったのはムラサキオカ  
ヤドカリ(在来種;国の天然記念物;写真3)。ヤ  
ドカリというと、海辺にいるように思うが、オカ

ヤドカリというだけあって、山でも生活している  
らしい。写真のムラサキオカヤドカリが家にしてい  
るのはアフリカマイマイ(外来種)。アフリカマイ  
マイは戦前、1935(S10)年ごろ、薬用や食用とし  
て持ち込まれた。アフリカマイマイは固有種のホ  
シツルランや陸産貝類に被害を及ぼした。アフリ  
カマイマイは、その後父島では減少しているのだ  
が、これは父島に現在侵入してしまっている、陸  
産貝類に対して最も脅威なプラナリアの影響と考  
えられている。父島ではプラナリアにより固有種  
の陸産貝類はほぼ絶滅してしまっているが、侵入  
を防げている母島には固有陸産貝類がまだ生息し  
ており、同じようにアフリカマイマイも数多く生  
息しているのである。アフリカマイマイが侵入し  
てくる以前のムラサキオカヤドカリの家はサザエ  
であったらしい。わざわざ海辺に戻り手頃なサイ  
ズの貝殻を探す労力に比べると、山に数多く転が  
っているアフリカマイマイの大きな殻はオカヤド



写真1 小富士への登山道入り口



写真3 ムラサキオカヤドカリ



写真2 防疫セット(写真は別場所のもの)



写真4 父島で見つけたアフリカマイマイの死がい

カリにとって都合が良いのだろう。サザエよりも大きなアフリカマイマイを家にすることでムラサキオカヤドカリが大きくなってきているという報告もあるとのことだった。

しばらく行くと、水がなく周囲との違いがよくわからないものの、もともとはレンコンを栽培していた蓮池だったという場所に、オオヒキガエル（外来種）が侵入して産卵しないようにと柵が張ってあった（写真5）。蓮池（半径30mほど）のオオヒキガエルは2007年に確認され、その後地元の人々の協力で捕獲を実施するとともに、柵を設置して、現在、ここ南崎ではほぼ見られなくなっているとのこと。オオヒキガエルは1949年にオオムカデやサソリ、ゴキブリの駆除目的で米軍によってサイパンから父島につれてこられ、母島には1975年に父島から持ち込まれた。その結果母島で急増し、水質が汚染されるとともに、地上性の陸産貝類やオガサワラチビクワガタといった希少種、小笠原独特の土を作る地表生物の食害が発生してしまった。

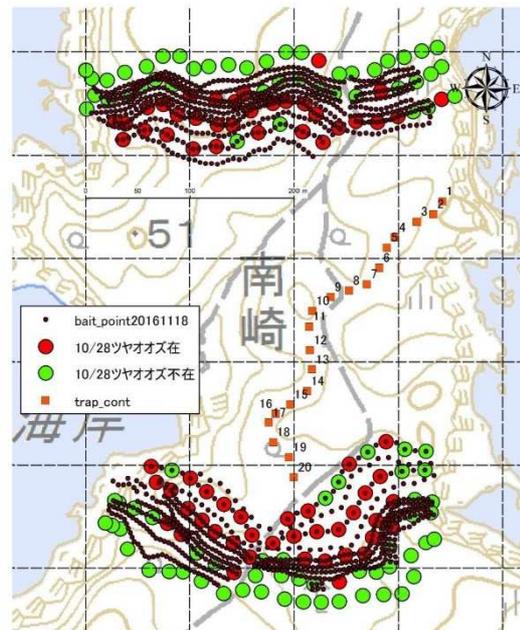


写真5 蓮池のオオヒキガエル侵入防止柵

オガサワラビロウ（固有種）の生い茂る中を抜けていくと、木の根元にザルのようなものが点々とおいてあるのを見つけた（写真6）。陸産貝類を食害するツヤオオズアリの駆除だ。金網のカゴは2つずつあり、1つは丸くてその中にアリホイホイが入っており、四角い方にはトラップの見回り結果を書くためのものが入っている。これが南崎に向かう半島に2本の帯のように設置されており、



写真6 ツヤオオズアリ対策



小笠原地域連絡協議会 H28 資料

外側から順にツヤオオズアリが完全駆除されたと判断されれば、内側にラインを移して、徐々に2本の帯の間隔を狭めていって、そのあたり一帯の完全駆除を目指すというものである。言葉ではうまく表現できないので、この調査の結果を図示した資料があるので、それを参考にされたい。現在では5mおきに約4000個のトラップが設置されていて、それを2週間に1回ずつ見回り、交換しているらしい。

昔は子供の遊び場だったという“すり鉢”とよばれる裸地のあたりで、マツの落葉のようなものが大量に降り積もっているのをたびたび見たので、何かと尋ねると、マツではなくモクマオウという

スギナの仲間の外来種であると教えられた（写真7）。モクマオウは1879（M12）年にインドから薪炭林や防風林として使うために持ち込まれたが、写真のとおり、落ち葉が大量に積もるため、他の植物が生えないという問題が生じている。すぐ近くには観葉植物として持ち込まれた外来種のムラサキオモトが群生している場所もあった。ムラサキオモトは、現在、日陰を好む陸産貝類の生息場所になっており、一斉に駆除してしまうと貝類も生息できなくなることから、まず在来種の植栽を行い、その苗が成長して貝類の本来の生息場所を確保してから駆除するとのこと。在来種、早く大きくなって欲しい（写真8）。



写真7 モクマオウの落葉が地表を覆う



写真8 モクマオウの落葉が降り積もったムラサキオモトの中に植えられた在来種（ピンクテープ）

しばらく進んで倒れた木を起こすと、希少な固有陸産貝類クロカタマイマイがいた（写真9）。カタマイマイは、小笠原諸島の中でも、分布場所（父島、母島北部、母島中部、母島南部）や生息場所

（樹上性、半樹上性、半地上性、地上性）で殻の色や形の特徴が異なり、ほぼ種が同定できるらしい。つまり、小笠原諸島の中で種分化しており、小笠原が「進化の実験場」と呼ばれる所以である。



写真9 クロカタマイマイ

やがて小富士山頂に到着。そこからは、カツオドリのヒナが多数みられる鯉島が見え、島の奥の方では樹上でアカアシカツオドリ（CHUMS!）が繁殖しているのが見えた。小富士からは南崎が一望できる（写真10）。南崎の先端より少し根元（写真でいうと右）に樹木の生えていない裸地があり、そこに人工物が見える（写真11）。これは、防ネコ柵「南崎海鳥保護柵」である。かつて南崎の先端は有人島で唯一の海鳥の繁殖地であったが、2005年ノネコ（有名な猫“マイケル”）にカツオドリやオナガミズナギドリのほとんど惨殺され、繁殖しなくなってしまったらしい。すぐにノネコ対策が実施され、10年後には再び繁殖するようになったとのことであった。また、昨年から今年にかけてクロアシホウドリが小富士の遊歩道にるのが目撃されている。目撃者のひとは私を案内してくださったMさんであり、そのときの動画を見せてもらった。クロアシホウドリはどんどんMさんに近づいてきていて、人を全く恐れていないようだった。ネコ対策や外来植物対策により海鳥の生息環境が改善されてきていることの表れだろう。島の人々にとって、とても明るいニュースであったに違いない。



写真10 小富士から南崎を望む；ポニンプルー！



写真11 南崎海鳥保護柵（裸地の黒い線）



写真12 石門地域、堺ヶ岳への入り口



写真13 アカギの森

14日9時、宿に迎えに来てくださったMさんに連れられ、堺ヶ岳に向かうトレッキングコース入口に。ここでも念入りに靴、服、ザックの防疫を行い、猪熊谷（いぐまだに）へ入っていく（写真12）。入るとすぐに、前日とは違う樹林風景に気づく。10～20mほどの高木がかなり密度高く生えており、亜高木層や低木層がやや薄く、目線を少し上に向けると本州にいるような気がしてくる。この高木層を形成しているのが、小笠原に定着した外来植物の中で生態系や在来植物に最も影響が大きいといわれているアカギであった（写真13）。アカギは明治時代に製糖のための薪炭林として成木が10本ほど沖縄から持ち込まれたのが最初で、その後もどんどん持ち込まれた。アカギは生長が早く、潮枯れに強く、耐陰性も高い。また、倒れても、切られても、そこからすぐに萌芽が育ち、たちまち樹林となるらしい。沖縄では民話に語られるほどの親しみのある木で、普通種（戦禍を生



写真14 伐採したアカギで整えられた道

き延びた高樹齢の大木は国指定の天然記念物）である。そんなアカギは、持ち込まれた場所で爆発的に増殖し著しい侵略性を持つ外来種の典型と言える。堺ヶ岳に向かう道は、そんなアカギで土留めがしてあった（写真14）。材が硬く、伐採が進められているため入手容易であることから、近自然工法として用いられているとのこと。ただし、上述のようにそんな風に切り刻まれた状態でも萌

芽がでてくるため、定期的に萌芽の除伐や稚樹の抜き取りを行っているらしい。トレッキングコースなので、それが可能なのだそうだ。

猪熊谷をさらに進み、リュウビンタイ(在来種)という巨大なシダを見る。ホソバリユウビンタイは父島にも母島にも分布し、リュウビンタイモドキは母島にだけ分布するらしい。このリュウビンタイ、八丈島の方言ではイグマというらしく、そのためこの谷は猪熊谷と呼ばれているのだそうだ。リュウビンタイが続く登山道に一本の大きな木(?)が倒れていた。小笠原固有種マルハチだ(写真 15)。マルハチはヘゴと同じく木性シダで、幹の中はスポンジ様で、枯れたら空洞になる。5年で1.5mしか生長しないと聞き、倒れてしまった8mほどのマルハチを見ると悲しくなった。陽性のシダと呼ばれるマルハチは、生長が早くあつという間に樹林を完全に覆うアカギには陽光競争で負けてしまうのだ(写真 16)。



写真 15 道に倒れたマルハチ



写真 16 アカギとマルハチの陽光競争  
(右下から真ん中に伸びるマルハチは枯死)

やがて標高が 300mを超え、雲霧帯が発生する湿性高木林に入る。ここで今一度防疫を行う。こんな登山道途中にある防疫セットを誰が更新しているかと聞くと、環境省と都のレンジャーが分担して行っているとのこと。ここに入るとアカギがなく、木漏れ陽が多い。植物もぐっと種類が増えた。ムニンヒメツバキやムニンシュスランといった固有種が出現してくる。ちなみに「ムニン」というのは、小笠原が昔「無人(ムニン)島」と呼ばれていたための言葉で、固有種の種名には「ムニン」、「オガサワラ」がついていることが多い。

どうしてそこにいるのがわかったのかわからないけど、Mさんが葉の裏をパラっとめくって見せてくれたのはオガサワラオカモノアラガイ(もちろん固有種;絶滅危惧II類(VU))、俗称ミズマンジュウというらしい(写真 17)。雲霧帯に生息しているため、乾燥から身を守らなくてよくなって殻がすごく薄くなっているとのこと。不思議な柄ですね、というとは、それは柄ではなく内臓だと。実は殻は透明なのだそうだ。葉の裏では丸まって全く動かなかったのがカタツムリなのかどうかもわからなかったが、Mさんがそっと葉の表に動かし、霧吹きで水をかけるとゆっくり体を伸ばして動き出した。角もでてきた。めっちゃ無防備だな。いかにも弱そう。この地域が乾燥し、隠れられる葉がなくなったり、湿度が低くても動ける天敵がきたらあつという間におしまいだな。と、純粋培養されてきた島の生物の脆弱性を目の当たりにした。



写真 17 オガサワラオカモノアラガイ

しばらく行くと、伐採されたアカギがあった(写真 18)。いろいろな試行錯誤の結果、アカギの駆除には薬剤処理で枯殺するという方法がとられている。また、枯殺した木が自然に倒れたり、伐採で倒したりすると、周囲の樹木を巻き込み、希少な種が失われる可能性があり、また陽を好まない種が生息できなくなったりするため、倒さずに輪切りにして、除去する方法をとる場合がある。このアカギはそうにして除去されていた(写真 19)。高木を輪切りにして除去する技術は高度な林業技術であり、専門の技術者でないと実施できないらしい。私が母島を訪問していた期間にもその技術者の方が母島の桑の木山で作業されていた。



写真 18 伐採されたアカギの切り株



写真 19 輪切りにされたアカギ

堺ヶ岳に近づくと、どんどん固有種が増えてくる。母島にあるハハジマノボタンは花弁は白で 5 枚(写真 20)だが、父島のムニンノボタンの花弁は白色で 4 枚。硫黄島のイオウノボタンの花弁は



写真 20 ハハジマノボタン



写真 21 苗木採取処置されているワダンノキ

赤紫という。小さなハハジマノボタンを踏まないように狭い登山道を上ると、骨折の治療をしているような枝をちよくちよく見るようになった(写真 21)。これは、在来種の植栽をする際に用いるためのものだそうだ。種や実生から育てると時間がかかるので、枝に傷をつけ、そこに水を含むものを巻き付けておくとそこから根が生えてくるという。一定の状態になったら、そこから先を植樹することができるのだそうだ。そういえば、途中で見たモクタチバナ(広域在来種)は、特に何もしなくても、水分の多い雲霧帯では水を吸おうと枝から根を出すというお話であった。

最初に言われていたことであったが、堺ヶ岳の頂上は藪で、林外は何も見えなかった。しかし、まわりにあるのは、ムニンセンニンソウやオガサワラボチョウジ、オオバシロテツといった固有種たち。眺望を求める観光客のためにこれからも伐採されないことを願いながら、下山の途についた。

母島列島の母島、向島、姉島にしか生息していないメグロは、小笠原諸島の固有鳥類だ。結構頻繁に目撃することができてうれしかった。実は、母島全体にメグロは分布しているらしく、1つがい約 50m×50m だというなわばりで母島はいっぱいなのだそうだ。推定羽数は 15,000 羽とか。だが、東崎にはいないという。これは東崎の首にあたる部分が狭く断崖絶壁で、メグロは飛び越えられないかららしい。そんなメグロなので分布している、母島、向島、姉島を往来することはない。これは環境の整った島の鳥にありがちな移動性を失うという進化であり、メグロはサイパンなどの南の島から遠く小笠原諸島まで飛んできた飛翔能力がありながら、現在は海を越えて隣の島に行くことはしないと、鳥類学者の川上和人さんは解説されている。さらにメグロは島ごとに遺伝的に独立しており、さらに島間では形態も有意に異なっており、特にくちばしの形態が異なっていたという。それってまさに、ダーウィンが進化論を確信したガラパゴスのフィンチ！

意図的、非意図的に持ち込まれた外来種であふれかえっている小笠原だけど、人々は少しずつだ



写真 22 メグロ

が本来の小笠原を取り戻そうと頑張っている。Mさんにどのくらいかかるんでしょうね、と聞くと、100年くらいはかかるんじゃない、と言われた。そのころにはメグロは島ごとに亜種と呼ばれるほど進化しているかもしれない。

補足：小笠原ですので、当然マリンスポーツも堪能しました。シーカヤック、シュノーケリング、沖でのドルフィンスイム。どこも、どれも最高に美しい海で、最高に楽しかったです（にわか観光大使・・・）。



写真 23 ど素人が撮影しても美しい南島（父島の属島） 海の色が圧巻 地上にワラワラいるカツオドリのヒナ、穴の中にかくれるオナガミズナギドリやアナドリのヒナにも会えた

# 本州のシカ捕獲事業における銅弾の即倒性能評価

—7年前の「業務で使う最適なライフル銃」への回答—

瀬戸 隆之 (ワイルドライフマネジメント事業部 関東支社)

## はじめに

今から約7年前、本誌 FIELD NOTE にて「業務で使う最適なライフル銃の検討」という記事を掲載していただいた。当時、散弾銃の経験しかなかった私は、来るべきライフル所持の日に想いを馳せ、故・森圭弘氏の遺稿集『弾道学にける夢』をバイブルとして、理論と妄想を煮詰めた「僕が考えた最強のライフル論」を大いに語ったものである。

あの頃の私は、森氏が語る弾道理論やリローディングデータブック上の数値に魅了され、机上の空論と言われても仕方のない、しかし情熱に溢れた考察を行っていた。

あれから時は流れ、私は次世代を担う頼もしい射手たちと出会い、本州では最大規模のシカの銃器捕獲事業の中で切磋琢磨してきた。

個人的には、当時記事の中で考察したライフル口径のほぼ全てを実際に導入し、捕獲現場でテストを行ってきた。また、現場に出入りする多くの射手たちがどのような実包を使用し、どのような結果を得たのか、貴重なデータ収集にも協力していただいた。

本稿は、それらの現実のデータを集計・分析したものであり、7年前の机上の理論に対する、一つの「答え合わせ」である。

## 研究の背景と課題

### 「残置」を前提とした捕獲と即倒の重要性

WMOの関東支社ではニホンジカの個体数調整事業を継続的に受注している。本事業の舞台となるエリアは、一般的な狩猟では立ち入ることのできない、業務だからこそ入場が許された特別なフィールドである。車両による移動が一切できないため、大型の捕獲器具を搬入・設置することは現実的ではな

く、数年に渡る試行錯誤の末、銃器による「忍び猟」が最も効率的な手法として採用されている。

本事業は車道のないエリアで行われている性質上、捕獲した個体の場所まで射手が辿り着き、証拠写真の撮影や個体データの計測を行うことができれば「捕獲成功」と定義される。そして記録終了後は、現地の生態系サイクルに委ねる形で、捕獲個体をその場に残置することが認められている（指定管理鳥獣捕獲等事業制度）。私たちが環境への影響を考慮し、非鉛弾の使用を絶対条件としているのは、この残置（＝他の動物が肉を摂取する可能性がある）が大前提にあるからだ。

しかし、現場には困難もある。シカを狙撃する場所自体は比較の見通しが良いことが多いが、一步そこを外れれば、シカが完全に隠れてしまうようなササ藪が広がっている。

バイタル（心臓・肺）を撃ち抜かれても、シカが最後の力を振り絞って藪の中へ逃げ込めば、発見の難易度が急上昇する。射手は藪の中を這いずり回り、積雪もない状況下で足跡と血痕を求め、時には1時間以上もかけて搜索することになる。その肉体的消耗は激しく、また搜索に時間を取られることは、そのまま次の捕獲機会の喪失へと繋がる。もし搜索を後回しにして捕獲作業を継続した場合には、射手は日没後にクマとの遭遇を警戒しながら、暗い藪内を延々と搜索することになる。

これらの理由から、実際に現場ではバイタルにヒットさせた確信があっても回収を断念するケースは多々あり、事実、発砲した総弾数の2/3程度しか捕獲数が計上できていない。これは個体数の削減数を実際より過少に計上してしまっているとも言える。これではもし将来捕獲手法を変えて、くくりわなで同じ「捕獲数」を達成しても、何故か思うよう

に個体数が減らないということにもなりかねない。

つまり、我々に求められているのは、単に「いつか死ぬ弾」ではなく、撃たれた瞬間にその場に崩れ落ちる「即倒」性能、あるいは少なくとも視認できる範囲内に留める強力なストップパワーなのである。

射手がその場から動かずに獲物の位置を確認できること。それが射手の無用な消耗を防ぎ、結果的に事業の成功確率を高め、そして動物が意識を喪失するまでの時間を短くするという動物福祉の観点からも重要な命題となる。

### 銅弾（非鉛弾）という制約

さらに問題を難しくしているのが、前述した銅弾の特性である。

従来の鉛弾は柔らかいため、着弾と同時に大きく変形し、運動エネルギーを効率よく破壊力へと変換できた。しかし、銅は鉛に比べて硬いため、着弾時の拡張（マッシュルーム化）が遅れる傾向にある。この弱点は、体格の大きな北海道のシカ（銅弾使用が普及している）よりも、むしろ体の厚みの乏しい本州のシカに使用した時に顕在化する恐れがある。弾頭が体から飛び出る頃になって拡張しても遅いからだ。

「当たっているのに倒れない」「綺麗に貫通しすぎて走られる」

現場の射手たちを悩ませるこの現象を、いかにして克服するか。それが本研究の最大のテーマである。

### 調査方法

2021年から2025年にかけての捕獲業務の従事者に情報提供を依頼し、所定の様式に沿って現場で記録していただいたデータを集計した。

収集したデータから、カートリッジ（口径）、弾頭重量、弾頭銘柄、初速、マズルエネルギー（銃口威力）、反動エネルギー、および被弾から絶命までの「直線逃走距離」を数値化して整理した。

データの集計にあたっては、射手の腕前によるバラつきを極力排除するため、着弾部位が「心臓・

肺（バイタルエリア）」であった事例のみを抽出した。なお脳や脊髄、頸椎といった中枢神経にヒットした場合には、当然のように即倒していることが確認されている（N=60、直線逃走距離の中央値=0m）。

### 結果と考察

#### 1. 「速度神話」の崩壊—243Winの誤算—

かつての私は、銅弾の硬さを克服するには「速度」こそが鍵であると考えていた。いわゆる水圧ショック理論（Hydrostatic Shock）によれば、着弾速度が2,600fpsを超えれば強力な神経ショックが発生し、即倒に至るとされる。

この理論に基づけば、小口径ながら3,500fpsという驚異的な銃口初速を誇る243Win（80gr TTSX）は、最強の即倒兵器になるはずであった（TTSXは拡張を促進するためのチップ（Tip）が先端に装着された弾頭）。

しかし、現実のデータは残酷であった。バイタルにヒットさせた事例（N=2）において、逃走距離の中央値は38m。期待した「即倒」効果は得られなかった。なお表には記載していないが、他の銅弾頭においても同様の結果であり、継続して使用するに堪えなかった。

要因として考えられるのは、弾頭の断面積の不足である。6mmという細さではシカの体内を通過する際の抵抗が少なすぎて、硬い銅弾が拡張するためのエネルギーを弾頭自身に伝えきれず、拡張が遅れてしまった可能性がある。そうだとすれば、弾速の速さは前述した銅弾の弱点を補うどころか助長してしまったのかも知れない。

いずれにしても「速度さえあれば倒れる」という仮説は、銅弾という条件下においては修正が必要であることが浮き彫りとなった。

#### 2. 「重量・口径」の正義と「スイートスポット」

本調査で最も明確な答えを示したのは、308Winの圧倒的なパフォーマンスである。

特に150gr TTSXを使用した場合の逃走距離中央値は0m。次いで168gr TTSXでも2.5m。

表. 2021～2025 年において WMO（関東支社）のシカの銃器捕獲事業に用いられたカートリッジと、それぞれが着弾した際のシカの直線逃走距離

カートリッジ (口径)	弾頭重量 (gr)	弾頭銘柄	初速 (fps)	銃口威力 (ftlb)	反動 (ftlb)	直線逃走距離(m)		
						N数	中央値	標準偏差
243win(6mm)	80	TTSX	3500	2200	9	2	38	33
6.5CreedMoor (6.5mm)	105	Maximus	2750	1800	9	9	30	21
	120	MTH	2900	2200	12	2	50	0
	125	Laser	2900	2300	12	2	60	20
	125	Maximus	2980	2500	13	8	5	33
7mm-08Rem (7mm)	139	LRX	3000	2800	15	5	5	15
	160	TSX	2400	2000	13	6	4	37
308win (7.6mm)	100	RAPTOR	3350	2500	11	3	10	45
	110	TSX	3200	2500	12	3	20	28
	110	TTSX	3200	2500	12	36	23	26
	150	TTSX	3000	3000	16	7	5	4
	150	Maximus	2800	2600	15	3	0	14
	168	TSX	2850	3000	18	16	40	40
	168	TTSX	2800	2900	17	13	5	14
	180	TTSX	2650	2800	18	24	18	37
20番散弾実包 (15.6mm)	275	フェデラル銅鉛	1900	2200	-	8	3	21
	300	DUPO	1650	1800	-	2	8	8
12番散弾実包 (18.5mm)	300	フェデラル銅鉛	1900	2400	-	19	10	29
	430	DUPO	1650	2600	-	16	30	32
	437	Barnes銅鉛	1500	2200	-	1	300	0

※着弾部位は全て「バイタル（心臓肺）」とする。

※着弾した個体が倒れている所を射手が発見できた場合のみ、直線逃走距離を目測で記録した。

※散弾銃の初速はメーカーの公称値を引用し、ライフル銃の初速は射撃場での実測の場合と、聞き取りおよびレシピブックからの推測の場合がある。

※ライフル銃の反動の計算にあたっては、一律に銃全体（スコープ等含む）の重量を8.5ポンド(約3.9kg)、火薬量を45grと仮定した。

※散弾銃の反動は火薬量に関する確かな情報が得られなかったため算出していない。

※逃走距離の中央値算出にあたりサンプル数が偶数の場合は、中央付近の2つの値の平均値を採用している。

つまり、バイタルに当たりさえすれば、過半数の個体が「その場」で倒れているか、倒れるようにして数メートル動いただけで絶命していた。

ここで興味深いのが、弾頭重量と逃走距離の関係性である。

308Win のデータだけを見れば「重いほうが良

い」となるが、さらに重量のある散弾（スラッグ弾）のデータまで視野を広げると、300gr から重量が増すにつれて逆に逃走距離が伸びる傾向が見られた。

例えば、比較的軽量の20番サボットは良好な結果を残したが、圧倒的な重量を誇る12番の430-437

gr 弾頭では、明らかに逃走距離が伸びている。

これは、「重ければ重いほど良い」という単純な話ではないことを示唆している。

これらの結果から、銅弾の即倒性能を最大化する弾頭重量には「スイートスポット」が存在し、それが 140gr~170gr 付近（散弾を含めても 300gr 程度まで）にあるのではないかと推察される。308Win は、弾頭自身がスムーズに拡張し、かつシカにエネルギーを伝えるための「断面積」「重量」「速度」を絶妙なバランスで兼ね備えていると考えられる。

### 3.65mm 口径における「ササ藪の 50 メートル」

比較対象として、近年世界的に大流行している 6.5 Creedmoor (6.5CM) のデータを見てみよう。

6.5CM (105gr~125gr) の事例では、Maximus (Cutting Edge 社製) という銘柄の破砕性弾頭以外は、逃走距離の中央値が 50m 以上となった。

直線距離で見れば大した距離ではないように思える。しかし、実際の現場においてこの逃走距離は致命的になり得る。

シカの背丈を超えるササ藪の中では、5 メートル程度入られただけでほとんど視界から消える。射手は時として 200m 以上遠方で狙撃されたシカが最後に逃走した方向を頼りに捜索を行うが、もし藪の中で方向転換されれば、その目星は完全に外れてしまう。「あの方向へ逃げたはず」という確信が「どこへ行ったかわからない」という疑心暗鬼に変わった瞬間、捜索範囲は線から面へと爆発的に拡大する。

308Win の「0m」と比較したとき、この「ササ藪の 50m」が孕むリスクは、数値以上に重い。

## 7 年前の「答え合わせ」と結論

### 7mm-08Rem の真価

かつて私が推奨した 7mm-08Rem についても触れておきたい。

今回の集計ではサンプル数が少なかったものの、139gr、160gr のどちらにおいても 308Win に肉薄する良好な結果を残した。

7mm-08Rem は、308Win に近い弾頭重量（スイートスポットに近い領域）を確保しつつ、反動はより

マイルドである。30 口径に近い「質量・断面積」が確保できていれば、実猟において十分に機能することの証明とも言える。

## 総括と今後の展望

以上の結果から、現時点での「業務（特に回収困難な場所）で使う最適なライフル（口径）」に対する私の見解は以下の通りである。

### 1. 迷ったら「308Win」の標準重量弾を使え

150gr~168gr のチップ付き銅弾を運用する 308Win は、タフな現場において最も信頼できる選択肢である。多少当たり所がずれても、その重量と太さでターゲットをねじ伏せる「懐の深さ」がある。

速度を求めて軽量弾に走るのは、少なくともバイタルショットという観点では得策ではない。

### 2. 小口径を使うなら「適切な弾頭選定」と「覚悟」を

6.5mm 以下の口径を使用する場合、口径と重量のハンデを補うために、必ずチップ付きや破砕性弾頭（Maximus 等）を選択すること。そして、バイタルヒットでも数十メートル走られるリスクがあることを認識し、より精密な射撃を心がける必要がある。

### 3. 今後の展望

今回の検証では、弾頭重量の「スイートスポット」の存在が浮き彫りになった。しかし、狙撃対象のシカがより小型な西日本の個体であった場合には、絶対的な獲物のタフネスは低いと見込まれる反面、エネルギー伝達の難易度はさらに上がる可能性がある。しかし現時点のデータ量では、シカの体格と即倒しやすさとの関係性を検討するのはまだ困難である。今後は、関東支社以外の現場も含めたより多くの射手から、対象個体の体格も含めたデータを収集できる仕組み作りを進めるとともに、この仮説の検証と、対象動物に応じた「最適解」の探求を続けていきたい。

# 「身近な隣人」になっていたクマについて

久門 美月（ワイルドライフマネジメント事業部 福島事業所）

## 1. はじめに

令和7年の1年を象徴する漢字に「熊」が選ばれた。ポジティブな採択理由であればクマ好きとしては嬉しかったが、残念ながらクマの出没や被害が相次ぎ世間的に大きな社会問題となったため選定されたようだ。令和5年もクマの出没が相次ぎ、連日お茶の間を騒がせたり、新たに国の制度や法律が変わったりした様子に驚いたが、それを上回る事態に色々考えさせられる1年だった。

個人的な話だが、令和7年の1月から神戸から山形に引っ越しして再び東北の住人になった。それによって、クマ問題は単なる興味深い話題ではなく、自分ごとの問題として認識せざるを得なくなった。今年の秋は山形市の公式LINEから連日クマの出没情報が発信されて、お散歩を断念した日がしばしばあった。

身近な隣人となったクマはいつからこんなに「身近」になってしまっていたのか。具体的にいえば令和5年と令和7年の未曾有のクマ大量出没に至るまでにどのような変化が起きてきたのか。少し時間を

さかのぼって、クマの大量出没、市街地出没について話をまとめてみたいと思う。

なお、本稿では主にツキノワグマの出没を中心に扱ったため、ツキノワグマについて「クマ」と表記している。

## 2. クマの大量出没の歴史

クマの大量出没の傾向を見ていくために、今回は環境省が取りまとめている許可捕獲数（都道府県知事もしくは環境大臣の許可を得て実施された有害捕獲数）を集計した<sup>\*1</sup><sup>\*2</sup>（図1）。クマの許可捕獲数には狩猟による捕獲が含まれていないことに留意が必要である。「クマの大量出没」の定義は捕獲数だけで表されるものではないかと思うが、長期的かつ全国的に収集できる情報として今回は許可捕獲数の推移を大量出没の歴史として見てみることにする。

### （1）平成のクマ大量出没

平成10年～平成15年まで捕獲数は700頭～1700頭程度で推移していて、年による変動が確認されていた。平成16年に初めて2000頭以上の捕獲が発生

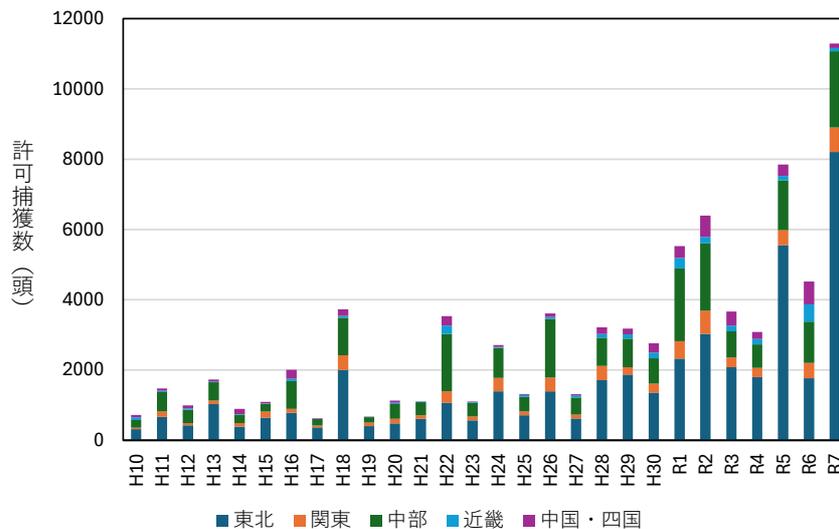


図1 許可捕獲数の推移（平成10年～令和7年（11月時点））

し、これが初めての「クマ大量出沒年」となった。この年は中部地方（特に北陸地方）での出沒が多く発生していて、地域限定的な出沒であるものの、平成のクマ大量出沒の先駆けとなった年であった。平成 17 年には一時的に捕獲数が大幅に減少したが、平成 18 年の捕獲数は 3,732 頭となって、平成 16 年を大きく上回る事態になった。この年は東北地方から中国・四国地方まで広い範囲で通常より捕獲数が増加する事態となり、全国的なクマ大量出沒であった。平成 19 年から平成 21 年までは再び 2,000 頭未満となる年が続いたが、平成 22 年から平成 26 年にかけては 2 年に一度の頻度で大量出沒が発生した。また平成 28 年から平成 30 年については捕獲数の値は高止まりした。平成の大量出沒が始まった頃から、平成の終わりにかけて徐々にクマの出沒の度合いは高まっていた様子が見受けられる。

関係者の間またはクマ出沒の周辺住人にとっては平成のクマ大量出沒については大きな問題になっていた。日本クマネットワークでは平成 22 年に発生した大量出沒を受けて「日本のクマを考える 繰り返されるクマの出沒・私たちは何を学んできたのか？ — 2010 年の出沒と対策の現状 —」というシンポジウムを開催し、森林総合研究所では平成 18 年～平成 22 年の間に大量出沒の予測に関する研究が行われていた。ただ令和 5 年や今年のクマ出沒と比較すると、まだ出沒の程度や社会の問題意識は低い時代だったと思う。

### (2) 令和のクマ大量出沒

令和元年の捕獲数は 5,529 頭、令和 2 年の捕獲数は 6,395 頭で、それまでの捕獲数よりも増加した。令和 3 年、令和 4 年は 3,000 頭程度に一時落ち着いたが、令和 5 年の捕獲数は 7,854 頭となり、未曾有のクマ大量出沒年となった。その 2 年後である令和 7 年は 11 月時点で、過去最大の 11,290 頭となった。この値は平成 10 年の捕獲数（725 頭）の約 15.5 倍である。

### (3) 地域別の推移

図 1 では、クマの息が確認されている 5 つの地方に分けて図化している。分け方については表 1 に記載した。

表 1 地方区分

東北地方	青森県、岩手県、宮城県 秋田県、山形県、福島県
関東地方	茨城県、栃木県、群馬県 埼玉県、千葉県、東京都 神奈川県
中部地方	新潟県、富山県、石川県 福井県、山梨県、長野県 岐阜県、静岡県、愛知県
近畿地方	三重県、滋賀県、京都府 大阪府、兵庫県、奈良県 和歌山県
中国・四国地方	鳥取県、島根県、岡山県 広島県、山口県、徳島県

各地域の捕獲数の推移を折れ線グラフで図化したものを図 2 に示す。全体を通して捕獲数が多いのは、東北地方、次いで中部地方、近畿地方、関東地方、中国地方となっている。平成 16 年は先に述べたように中部地方での捕獲数が増加した年であった。平成 18 年、平成 22 年、平成 24 年については程度の差はあるが、複数の地域で連動して捕獲数が増加した様子が見られる。一方平成 28 年、平成 29 年については東北地方だけ増加した。令和元年や令和 2 年は中部地方の捕獲数の増加率が高い。また、令和 5 年や令和 7 年の未曾有の大量出沒で大きく捕獲数が増加したのはほとんど東北地方であった。

### 3. 市街地出沒について

市街地での捕獲数や出沒数といった数値が全国画一的に収集されたデータを見つけることができなかつたため、私が今までみたシンポジウムやニュースで得た情報ベースに市街地出沒の流れを簡単に記載する。（そのため情報の収集に偏りが発生し、不足している情報が数多くあることをあらかじめご了承ください。）

私が初めてクマの市街地出沒について課題として認識したのは平成 27 年（2017 年）に札幌で行われた日本クマネットワークのシンポジウム「記念講演／20 年のあゆみ・市街地に侵入するクマ」だ<sup>\*3</sup>。シンポジウム内では札幌市で平成 23 年～25 年にヒ

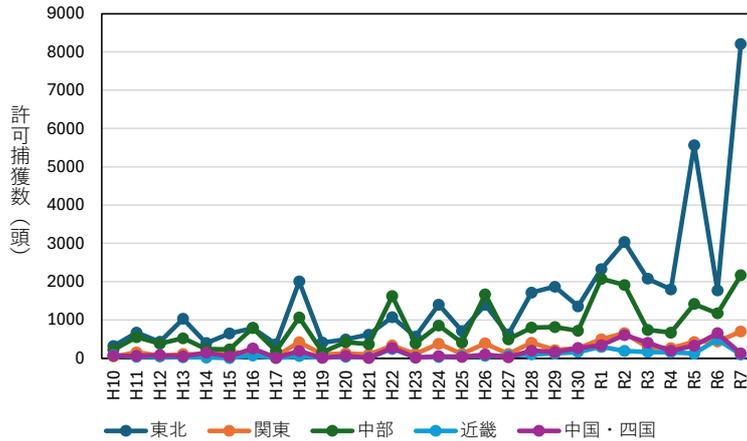


図2 地域別の許可捕獲数の推移（平成10年～令和7年（11月時点））

グマが出没した話や長野県内で平成22年、平成24年に市街地に出没した話題が提供された。つまり三度目の大量出没年である平成22年辺りから散発的に市街地出没が発生していたようだ。当時すでに市街地出没の要因としてクマの生息域の拡大や侵入経路として河川が利用されている可能性が示唆されていた。

令和に年号を変えると単なる出没にとどまらず生活被害や人身被害につながるような市街地出没が発生するようになっていった。令和2年に石川県で発生したクマがスーパーマーケットに侵入した事件<sup>※4</sup>はクマが人のエリアに近づきすぎていることを象徴するようなニュースだった。また、令和4年には岩手県の盛岡駅周辺でのクマの目撃が相次いで発生した<sup>※5</sup>。令和5年の未曾有のクマ大量出没の年には、人身被害も数多く発生していて、人身事故が山中や農地ではなく市街地周辺でも多数発生したことが報

告されている（図3）。

市街地出没は平成のクマ大量出没の時代から散発的に発生し、その出没件数や地域が年々増加・拡大していった。市街地出没は単なる出没に留まらず、人身被害の増加を招いてしまったと考えられる。

#### 4. 人身事故発生の年次変化

環境省が取りまとめている平成20年から令和7年（11月時点）のクマによる人身被害発生人数について図4にまとめた<sup>※7</sup>。残念ながら初期のクマ大量出没年の平成16年、平成18年の情報は含まれていないのだが、その後の平成22年、平成26年の大量出没年には人身事故件数が増加したことが示されている。ただ平成24年の大量出没年は前後の年と同程度の発生件数だった。

令和元年、令和2年の大量出没の時には150人を超える人身事故が発生して、当時過去最大となって

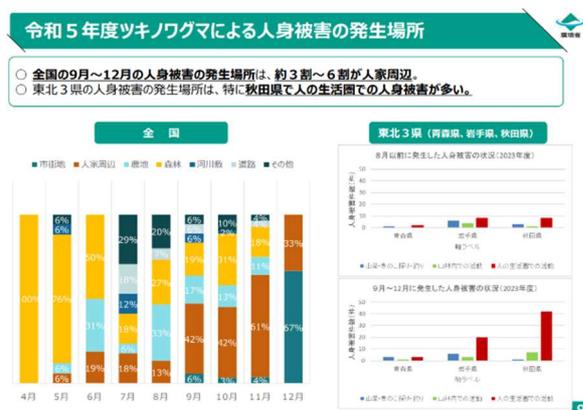


図3 令和5年度人身被害の発生場所<sup>※6</sup>

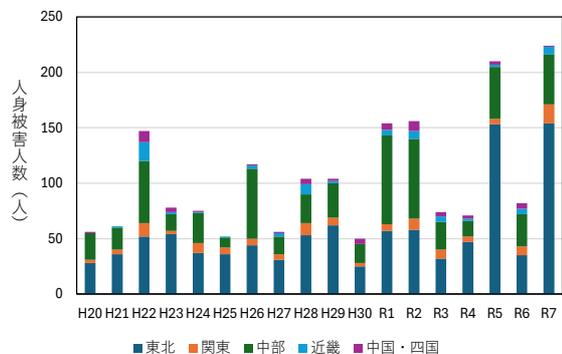


図4 人身被害人数の推移（平成20年～令和7年（11月時点））

いた。令和5年と令和7年の人身被害人数はさらに突出していて、それぞれ210件と224件だった。

また、クマによる人身被害の死亡数について図5にまとめた。死亡数は許可捕獲数や人身被害人数と相関が強いわけではなく、0人～2人の年が多い。平成28年の4件は秋田県の鹿角で起きた被害で当時全国的に大きく報道された。令和に入っても死亡数の大きな増減はみられなかったが、令和7年は11月時点で11人と過去最悪の事態になっている。

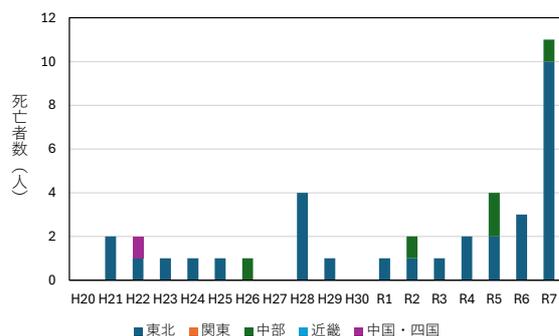


図5 クマによる死亡者数の推移  
(平成20年～令和7年(11月時点))

人身事故や死亡事故は多くは東北地方で発生しており、次いで中部地方で発生している。クマによる大量出没は数多くの課題があるが、特に東北地方や中部地方ではクマの人身被害をなくすことが最も重要な目標の一つになると考えられる。クマによる人身被害の一般的な発生状況は、今まで山中や農作業中に単独で活動していてクマと偶発的に出会ってしまった際に起きるといわれていた。しかし、令和5年や令和7年の人身被害は市街地周辺で発生したり、複数人で活動していた際に襲われる場合も報告されており、人身被害発生の原因解明はこれからの課題である<sup>※8</sup>。

## 5. まとめ

私が今回データを改めて振り返って思ったのは、令和5年、令和7年の未曾有のクマ大量出没は突然発生したのではなく、徐々に段階を踏んでここまでの大きな出来事になったということだ。また、これらのトレンドを地域ごとにまとめてみたことで、全

国で全く同じようなトレンド、程度で発生はしておらず、地域ごとの特性があるということも改めて感じた。

冒頭で疑問にあげた「クマはいつからこんなに身近になっていたのか」という疑問の答えは、平成の中期頃から徐々にというのが一つの答えなのではないかと思った。

## 6. 最後に

ここまで駄文にお付き合いいただきありがとうございました。色々な場所で語られていたことの繰り返しのような内容になってしまったかと思いますが、個人的には令和5年と令和7年のクマ大量出没は何だったのか改めて振り返れた機会になりました。これから東北地方に住む一員として、自分も動けることは何か考えて行動していければと思います。

今回はクマ側の変化にフォーカスしてまとめてみましたが、クマに対する社会(ヒト側)も大きく変化していきいていると感じます。もし何とか情報をまとめることができれば再びFieldNoteに投稿したいと思います。

## 参考文献

- ※1 鳥獣関係統計(平成10年～平成19年). 環境省. <https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs2.html> (参照 2026-1-16)
- ※2 クマ類の捕獲数(許可捕獲数)について [速報値]. 環境省. <https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/capture-qe.pdf> (参照 2026-1-16)
- ※3 記念講演/20年のあゆみ・市街地に侵入するクマ. 日本クマネットワーク. <https://www.japanbear.org/wp/wp-content/uploads/2017/11/522ad7ad5b71db035775197c481229dc.pdf> (参照 2026-1-16)
- ※4 【石川】手が届く距離にクマ 加賀・商業施設に侵入. 中日新聞. 2020-10-20. <https://www.chunichi.co.jp/article/140055> (参照 2026-1-16)
- ※5 【警戒続く】クマの目撃相次ぐ「クマが移動している」岩手・盛岡市. 日テレNEWS. 2022-8-

12. <https://www.youtube.com/watch?v=qbiHsUNdt6U&t=25s> (参照 2026-1-16)

※6 クマ類による被害防止に向けた対策方針 (令和6年2月8日) クマ類の生息状況、被害状況等について (参考資料1). 環境省. <https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-situation.pdf> (参照 2026-1-16)

※7 クマ類による人身被害について [速報]. 環境省. <https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/injury-qe.pdf> (参照 2026-1-16)

※8 日本クマネットワーク. 2025年秋季のクマ類を巡る状況に関する現状整理. <https://www.japanbear.org/wp/wp-content/uploads/2025/11/JBN-genjoseiri2025.pdf>

---

## 新人紹介

今年1月より関東支社へ配属となりました、松木一幸 (まつき かずあき) と申します。

まず、全くの他業界から今回ご縁を頂けた事、感謝いたします。

出身は北海道 帯広市です。転勤の多い家庭だったため、北海道での居住期間は大学時代の4年間が主ですが、小中高の長期休暇中は北海道で過ごしており、“地元は?”と聞かれれば北海道と答えております。しかし住民票上は生誕～大学へ入学するまでの18年間、道民ではないと言う事になっており、原理主義派の親族には“内地の人間だろ”と指摘され続ける人生でした。

北海道の大豪農に憧れ農業高校へ進学したものの新規就農のハードルは高く、大学進学へ進路を方向転換、東京農業大学 (北海道キャンパス) へ進学いたしました。

大学では、主に水圏の生物について学び、1年次から海棲哺乳類に関する研究をしていた研究室を出入りしていた事もあり、同研究室で鰭脚類とそれらへ寄生するハイダニ科を研究対象としておりました。

フィールド調査やラボ作業だけ参加していたものも含めると、海棲哺乳類を対象としたセンサス・消化管寄生虫の寄生状況調査・生殖器 (精巢) を用いた性成熟の状況調査、陸上動物ではエゾユキウサギの糞中 DNA に関する調査など幅広く手を出して

いました。

元々、生き物への強い興味があり大学でもそれらについて学んでおりましたが、大学卒業後は無人潜水艇 (ROV) のパイロットや海底ケーブルの接続技術者として働いたり、環境コンサルティング会社で海底資源探査や深海生物探査をしたりなど、本当に全く関係のない業界に身を置いておりました。

日常的に何か月もの期間、洋上や海外の僻地へ出張していた事もあってか、帰国日の電車内で SNS や動画配信サービスを利用している若者を見る度、“スマホの通信規格を 2G にすれば出張が減るのでは?! ”などと突飛な考えをする事も多々ありましたが、様々な国や地域の人々の役に立っているというやり甲斐を感じながら日々勤めておりました。

そんな洋上への出張中、WMO の職員募集情報を知り、“やはり自分は生き物に関わる仕事がしたい”と強く認識し周囲数百キロ何もない洋上から応募致しました。

未経験の業界ですので、業務を進めるうえでの手技や作法をご指導していただきつつ、これまでの経験も活かしたら最良と考えております。

皆様から頼りにされる存在となる事を目指し精進いたしますので、ご指導ご鞭撻をいただけますと幸甚に存じます。



## WMO活動報告 2025年10月～12月

- 効果的な内水面水産資源被害防止技術開発事業委託〔水産庁〕
- 箕面国有林におけるニホンジカの生息状況外モニタリング調査委託事業〔近畿中国森林管理局〕
- ニホンジカ及びイノシシの個体数推定等業務〔環境省〕
- 国立公園におけるクマ対策の手引書作成業務〔環境省〕
- 東北カワウ広域協議会企画運營業務〔東北地方環境事務所〕
- 尾瀬及び日光国立公園におけるニホンジカ捕獲調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 富士箱根伊豆国立公園箱根地域シカ管理対策検討調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 尾瀬及び日光国立公園ニホンジカ対策広域協議会運營業務〔関東地方環境事務所〕
- 関東山地ニホンジカ広域保護管理調査等業務〔関東地方環境事務所〕
- 日光国立公園白根山ニホンジカ生息密度推定調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 国指定紀伊長島鳥獣保護区カワウ生息状況等調査業務〔中部地方環境事務所〕
- 国指定紀伊長島鳥獣保護区トブネズミ対策手法検討業務〔中部地方環境事務所〕
- 四国のツキノワグマ錯誤捕獲等緊急対応業務（単価契約）〔中国四国地方環境事務所〕
- ツキノワグマ市街地出没対応訓練業務〔岩手県〕
- 宮城県カワウ個体群管理業務〔宮城県〕
- ツキノワグマ出没対策促進業務委託〔秋田県〕
- 避難地域鳥獣対策支援業務〔福島県〕
- カワウ行動追跡調査業務委託〔福島県〕
- 特定復興再生拠点解除区域におけるニホンザル広域対策事業業務委託〔福島県〕
- 鳥獣被害対策に係る生活環境被害防止モデル事業〔福島県〕
- 避難地域鳥獣被害広域戦略策定事業業務委託〔福島県〕
- 茨城県アライグマ防除実施計画策定業務〔茨城県〕
- 高原地域ニホンジカ行動調査業務〔栃木県〕
- ドローンを活用した銃猟効率化実施事業業務〔栃木県〕
- 赤城山ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 神津地区ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 群馬県ニホンジカ生息状況調査〔群馬県〕
- イノシシ・ニホンジカ生息状況調査及び個体数推定業務〔埼玉県〕
- 外来種特別対策事業（アカゲザル等）業務委託〔千葉県〕
- ニホンザル生息状況調査等業務委託〔千葉県〕
- 大島キョン防除委託 組織銃器C〔東京都〕
- ツキノワグマ市街地等出没時対応訓練（緊急銃猟）業務委託〔東京都〕
- ニホンザル生息状況調査業務委託〔神奈川県〕
- クマ糞試料サンプリングキット購入〔神奈川県〕
- ツキノワグマモニタリング調査候補地選定業務委託〔神奈川県〕
- ニホンジカ生息状況調査業務委託〔神奈川県自然環境保全センター〕
- 区画法新規区域設定調査業務委託〔神奈川県自然環境保全センター〕
- ニホンジカ生息状況調査業務委託（ドローン）〔神奈川県自然環境保全センター〕

- 公園整備工事 県単(その809)〔神奈川県厚木土木事務所〕
- 福井県サル群れ行動圏調査業務〔福井県〕
- 福井県ニホンジカ管理計画モニタリング業務〔福井県〕
- 山梨県中央線沿線ニホンジカ動態調査業務(大月エリア)〔山梨県〕
- ツキノワグマ生息等モニタリング調査業務〔山梨県〕
- ニホンジカ及びイノシシ生息等モニタリング調査業務〔山梨県〕
- 山梨県ツキノワグマ緊急銃猟対応マニュアル作成及び訓練実施業務委託〔山梨県〕
- ニホンジカ影響下の植生回復等調査業務委託〔山梨県森林総合研究所〕
- 岐阜県野生動物モニタリング調査業務委託〔岐阜県〕
- 岐阜県ツキノワグマ生息状況調査業務委託〔岐阜県〕
- GPS ロガー装着によるカワウ飛来動向調査委託業務〔岐阜県〕
- ニホンザル GPS モニタリングモデル事業委託業務〔岐阜県〕
- ツキノワグマ生息実態調査業務委託〔静岡県〕
- ツキノワグマ生息環境調査業務委託〔静岡県〕
- ツキノワグマ個体数調査業務委託〔愛知県〕
- ツキノワグマ保護等業務委託(単価契約)〔三重県〕
- 三重県ニホンザル生息状況調査業務委託〔三重県〕
- ツキノワグマ移動放獣業務〔滋賀県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業(効果的捕獲促進事業)捕獲調査業務(伊吹山)〔滋賀県〕
- 森林動物行動圏等調査事業委託業務〔滋賀県〕
- 第一種特定鳥獣保護計画モニタリング調査事業(ツキノワグマ)委託業務〔滋賀県〕
- ツキノワグマ保護管理事業〔京都府〕
- 野生鳥獣(イノシシ・ニホンジカ・ニホンザル)生息動態調査業務〔京都府〕
- 野生鳥獣(ツキノワグマ)生息動態調査業務〔京都府〕
- ツキノワグマ放獣業務委託〔兵庫県〕
- カワウ管理協議会の運営補助及び管理手法実証業務〔兵庫県〕
- シカ捕獲・GPS 装着業務〔兵庫県森林動物研究センター〕
- 捕獲檻ニホンザル電波発信機およびGPS 首輪装着業務委託〔兵庫県森林動物研究センター〕
- 紀伊山地カモシカ保護地域第6回特別調査委託業務〔奈良県〕
- 奈良県ニホンザル生息状況調査業務〔奈良県〕
- 和歌山県ツキノワグマ保護管理対策業務〔和歌山県〕
- 有害ニホンザルの群れ捕獲業務〔和歌山県〕
- ニホンザルの生息状況調査(GPS を活用した群れ調査)業務〔和歌山県〕
- イノシシ生息状況調査業務〔和歌山県〕
- ニホンザル生息状況調査業務〔和歌山県〕
- 指定管理鳥獣(ツキノワグマ)放獣業務〔鳥取県〕
- 特定鳥獣生息実態調査業務〔鳥取県〕
- 指定管理鳥獣生息実態調査(ツキノワグマ)業務〔鳥取県〕
- 鳥取県ツキノワグマ等出没対応マニュアル作成業務〔鳥取県〕
- カワウ捕獲・被害抑制対策等業務〔鳥取県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定調査業務〔鳥取県〕
- 島根県ニホンザル被害対策事業業務〔島根県〕

- 島根県集落点検事業業務〔島根県〕
- 島根県ツキノワグマ遺伝構造解析業務〔島根県〕
- 島根県ニホンジカ糞塊密度調査〔島根県〕
- 島根県イノシシ個体群動態の推定に関する業務〔島根県〕
- 島根県ニホンジカ個体群動態の推定に関する業務〔島根県〕
- 野生鳥獣調査事業（ニホンジカ、イノシシの生息数推定業務）〔岡山県〕
- 野生鳥獣調査事業（ニホンザル生息状況調査）〔岡山県〕
- 岡山県カワウ被害防止総合対策事業〔岡山県〕
- ツキノワグマ被害防止対策研修（市町村職員等スキルアップ研修）〔岡山県〕
- 堅果類等豊凶調査業務〔広島県〕
- 特定鳥獣等生息状況モニタリング調査・分析等業務〔広島県〕
- 広島県ニホンジカ林業被害実態等調査分析業務〔広島県〕
- 緊急銃猟研修業務〔広島県〕
- 緊急銃猟対応人材育成業務〔広島県〕
- わな免許取得者へ向けた捕獲・処理技術の向上研修業務〔山口県〕
- ニホンジカ個体数推定業務及び生息状況調査〔山口県〕
- 鳥獣被害対策アドバイザー支援業務〔山口県〕
- ニホンザル生息状況調査〔山口県〕
- ニホンザル対策強化事業〔徳島県〕
- 徳島県指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定等支援業務〔徳島県〕
- ニホンジカ生息状況モニタリング調査解析業務〔徳島県〕
- シカによる森林被害緊急対策事業委託業務〔愛媛県〕
- 指定管理鳥獣（ニホンジカ）捕獲等業務〔石鎚山系〕〔愛媛県〕
- サル被害総合対策普及事業委託業務〔高知県〕
- かんしょ産地サル被害対策実証事業 ニホンザル生息状況調査等委託業務〔大分県〕
- ニホンザル発信機装着業務委託〔東京都八王子市〕
- サル個体数調査業務委託（その2）〔東京都檜原村〕
- 警戒システム GPS 発信器装着業務委託〔東京都奥多摩町〕
- タイワンザル生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- クリハラリス生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- 大島町タイワンザル囲いわな購入〔東京都大島町〕
- 大島町タイワンザル囲いわな移設〔東京都大島町〕
- ツキノワグマゾーニング管理導入支援業務〔長野県高森町〕
- サル対策研修講師派遣業務〔岐阜県関市〕
- 静岡市ニホンザル行動圏把握調査業務〔静岡県静岡市〕
- ツキノワグマ不動化業務委託〔三重県熊野市〕
- ツキノワグマ講習会業務委託〔三重県熊野市〕
- ツキノワグマ保護等業務委託〔三重県紀北町〕
- ニホンザル彦根 C1 群個体数調査委託業務〔滋賀県彦根市〕
- ニホンザル個体数・行動域調査業務〔滋賀県長浜市〕
- ハナレザル捕獲対応業務〔滋賀県栗東市〕
- ニホンザル有害捕獲業務委託〔滋賀県甲賀市〕

- ニホンザル個体数・行動域調査用 GPS 首輪取り付け業務委託（今津B群）〔滋賀県高島市〕
- ニホンザル個体数調整業務委託〔滋賀県日野町〕
- ニホンザルモニタリング調査業務〔滋賀県日野町〕
- ニホンザル（日野 A1 群、F1 群）モニタリング調査委託業務〔滋賀県日野町〕
- ニホンザル個体数調整業務委託（多賀 C1 群）〔滋賀県多賀町〕
- ニホンザル個体数調整準備業務委託（多賀 F3 群）〔滋賀県多賀町〕
- 総合獣害対策事業 東山地域イノシシ等大型獣対策業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（京都A群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業久多ニホンザル（京都D群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（亀岡A群）管理業務〔京都府京都市〕
- ツキノグマ出没防止に係る集落環境点検支援事業委託業務〔京都府京都市〕
- ツキノワグマ出没対応訓練業務〔京都府京都市〕
- ツキノワグマ対策支援事業業務委託〔奈良県奈良市〕
- ツキノワグマ有害捕獲個体処理業務〔和歌山県広川町〕
- ツキノワグマ出没時安全対策業務委託〔鳥取県智頭町〕
- ツキノワグマ有害捕獲個体処理委託業務〔鳥取県八頭町〕
- 天然記念物臥牛山のサル生息地 天然記念物食害対策事業 ニホンザル発信機装着業務〔高梁市教育委員会〕
- 天然記念物臥牛山のサル生息地 天然記念物食害対策事業 ニホンザル個体数調査業務〔高梁市教育委員会〕
- サル被害総合対策モデル事業〔岡山県真庭市〕
- ニホンザル捕獲業務〔岡山県真庭市〕
- イノシシ市街地出没対策に係る捕獲業務〔広島県福山市〕
- 東広島市有害鳥獣アドバイザー業務委託〔広島県東広島市〕
- 東みよし町ニホンザル行動圏等調査及び個体数調整業務〔徳島県東みよし町〕
- ニホンザル人的被害防止対策・捕獲業務委託〔福岡県那珂川市〕
- 有害鳥獣捕獲処理業務委託〔福岡県那珂川市〕
- ニホンザル生息状況調査等業務委託〔福岡県那珂川市〕
- ニホンザル GPS 首輪データ解析業務委託〔福岡県那珂川市〕
- サル用 GPS 首輪、GPS 受信機器〔福岡県那珂川市〕
- 福島県鳥獣被害防止総合対策交付金事業 ツキノワグマ生息状況調査業務委託〔郡山市鳥獣被害防止対策協議会〕
- ニホンザル効果的捕獲促進事業業務委託（小綱木B群3年目）〔川俣町農林産物有害鳥獣対策協議会〕
- ニホンザル効果的捕獲促進事業業務委託（飯坂群）〔川俣町農林水産物有害鳥獣対策協議会〕
- 鳥獣被害防止総合対策交付金 ニホンザル生息状況等調査業務〔南房総市有害鳥獣対策協議会〕
- 白山・奥美濃地域ツキノワグマ生息状況調査業務〔白山・奥美濃地域ツキノワグマ広域協議会〕
- 鳥獣害のない里づくり推進事業ニホンザルモニタリング調査業務〔大野市鳥獣害対策協議会〕
- ニホンザル越前C群捕獲個体発信器装着業務〔鯖江市鳥獣害対策協議会〕
- ニホンザル GPS 首輪装着業務〔越前市鳥獣対策協議会〕
- ニホンザルモニタリング・研修会開催業務委託〔池田町総合農政推進協議会〕
- 南越前町ニホンザル生息状況調査業務〔南越前町鳥獣害対策協議会〕
- 越前町ニホンザル調査業務〔越前町鳥獣害対策協議会〕
- 野生いのしし経口ワクチン野外散布に係る総括業務委託〔岐阜県経口ワクチン対策協議会〕
- 個体数調査業務委託〔大垣市鳥獣被害防止対策協議会〕
- GPS データダウンロード業務委託〔大垣市鳥獣被害防止対策協議会〕

- GPS 首輪装着業務委託 [大垣市鳥獣被害防止対策協議会]
- ニホンザル被害対策事業 [美濃加茂市鳥獣被害防止対策協議会]
- ニホンザル生息状況調査等業務 [揖斐川町鳥獣被害対策協議会]
- ニホンザルテレメトリー調査業務 [豊川市鳥獣被害防止対策協議会]
- ニホンザル行動域調査業務委託 [四日市市鳥獣被害防止総合対策事業推進協議会]
- ニホンザル生息状況等調査業務委託 [菰野町鳥獣被害防止総合対策協議会]
- 竹生島植生被害モニタリング調査業務 [竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会]
- ニホンザル群れ移動追跡用 GPS ロガー装着業務委託 [湖東地域広域鳥獣被害防止対策検討会議]
- 北近畿東部地域ツキノワグマ生息動態調査等業務 [北近畿東部地域ツキノワグマ広域保護管理協議会]
- ニホンザル (舞鶴C群) 生息状況モニタリング調査業務 [舞鶴市有害鳥獣被害防止対策協議会]
- 宮津A群個体数調査業務 [伊根町野生鳥獣被害対策運営協議会]
- 伊根A群発信機装着業務 [伊根町野生鳥獣被害対策運営協議会]
- 鳥獣被害防止総合対策交付金事業 大丹波地域ニホンザル篠山B群 (園部A群) 発信器装着業務  
[大丹波地域サル対策広域協議会]
- 大淀町ニホンザル生息状況調査業務 [大淀町鳥獣被害防止対策協議会]
- ニホンザル捕獲業務 [福山市鳥獣被害対策協議会]
- つるぎ町ニホンザル等捕獲駆除業務 [つるぎ町有害鳥獣対策協議会]
- ニホンザルモニタリング業務 [つるぎ町有害鳥獣対策協議会]
- ニホンザル生息状況調査業務委託 [福岡市鳥獣被害対策協議会]
- スマート捕獲事業 サル GPS 首輪装着業務委託 [人吉市有害鳥獣被害対策協議会]
- 山江村鳥獣被害防止対策協議会有害鳥獣複合対策業務委託 [山江村鳥獣被害防止対策協議会]
- 自動撮影カメラ・熱赤外搭載ドローンによるシカ生息密度推定業務 [京都先端科学大学]
- ニホンザル有害捕獲業務 [一般社団法人越前市獣害防止対策ネットワーク]
- 宮崎県五ヶ瀬町における獣害対策をきっかけとした新規地域貢献事業の立ち上げ支援業務  
[ENEOS リニューアブル・エナジー株式会社]
- 第2期野生イノシシ経口ワクチン野外散布実施業務委託 [一般社団法人神奈川県畜産会]
- ツキノワグマ放獣業務 [特定非営利活動法人四国自然史科学研究センター]
- 住居等の周辺における大型鳥獣出没対応検討業務 [一般財団法人自然環境研究センター]
- 「低コスト再造林実証支援事業」に係る調査 [中江産業株式会社]
- 長野県ニホンザル対策支援補助業務 [一般社団法人ニホンザル管理協会]
- 東日本旅客鉄道株式会社八王子支社管内における野生鳥獣と列車の衝撃事故分析業務 [東日本旅客鉄道株式会社]
- 地域リーダー (森林) 及び鳥獣被害対策コーディネーター育成研修事業における教材改訂及び研修会開催・  
講師等 (委託) [株式会社野生鳥獣対策連携センター]
- 環境をあつかう実務とキャリアプランニング (横浜国立大学) ..... 講師: 岸本
- 白川町ニホンザル被害防止対策講演会..... 講師: 海老原
- さばえのけものアカデミー (第14期) (鯖江市) ..... 講師: 中川
- ツキノワグマ対応研修会 (吉野地方農業委員会協議会) ..... 講師: 中川
- ツキノワグマ対策研修会 (近畿管区警察局) ..... 講師: 中川
- 奈良県緊急銃猟訓練 (奈良県) ..... アドバイザー: 中川
- カワウ保護及び管理に関する検討会 (環境省) ..... 検討委員: 加藤(洋)
- ニホンジカの保護及び管理に関する検討会 (環境省) ..... 検討委員: 濱崎
- 鳥獣の管理の強化及び保護の推進に関するワーキンググループ (環境省) ..... 委員: 中川

- 屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキンググループ……………委員：濱崎
- 鳥獣被害対策データ活用促進検討会（農林水産省）……………委員：清野
- 福島県野生鳥獣保護管理検討会（ニホンジカ）……………委員：濱崎
- 神奈川県ニホンザル管理検討委員会……………オブザーバー：海老原・豊川
- 山梨県イノシシ・ツキノワグマ保護管理会議……………オブザーバー：奥村
- 静岡県カモシカ管理検討会……………委員：濱崎
- 静岡県ニホンジカ保護管理検討会……………委員：濱崎
- 静岡県カワウ食害防止対策検討会……………委員：加藤(洋)
- 滋賀県ニホンザル第二種特定鳥獣管理計画検討会……………アドバイザー：濱崎
- 滋賀県ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画検討会……………アドバイザー：濱崎
- 滋賀県イノシシ第二種特定鳥獣管理計画検討会……………アドバイザー：濱崎
- 福岡県特定鳥獣（イノシシ・シカ）保護管理検討会……………委員：横山
- 日本哺乳類学会 外来動物対策作業部会……………委員：白井・佐伯・渡邊
- 日本哺乳類学会 ニホンザル保護管理検討作業部会……………委員：清野・海老原・藏元
- 日本哺乳類学会 シカ保護管理検討作業部会……………副部長：横山、委員：濱崎・岸本・大西
- 日本哺乳類学会 クマ保護管理検討作業部会……………副部長：中川
- 日本哺乳類学会 カモシカ保護管理検討作業部会……………委員：西村・関
- 日本哺乳類学会 イノシシ保護管理検討作業部会……………委員：竹内
- 日本霊長類学会 霊長類保全福祉委員会……………幹事：白井
- 日本野生動物医学会 ニュースレター編集委員会……………委員：後藤
- 「野生生物と社会」学会 青年部会……………役員：本橋・渡邊
- 「野生生物と社会」学会 「野生生物と社会」編集委員会……………編集幹事：渡邊
- 「野生生物と社会」学会 ワイルドライフ・フォーラム誌編集委員会……………副編集委員長：本橋
- 日本生態学会 保全生態学研究編集委員会……………委員：岸本
- IUCN /Species Survival Commission (SSC)/ Primate Specialist Group/日本グループ……………メンバー：白井
- TWS / The Wildlife Society / International Wildlife Management Working Group……………委員長：大西
- TWS / Southeast Section of TWS……………秘書：大西
- TWS / The Wildlife Society / TWS Japan Student Chapter……………とりまとめ役：大西
- Tator & Francis/ *Asian Anthropology* 誌/……………書評委員：近藤
- 野生動物の形態、生理、生態等に関わるデータ・試料の蓄積
- 野外における野生動物の麻酔方法の検討



『FIELD NOTE』は会員の皆様の情報交換の場です。  
 各種お知らせ・イラスト・原稿・ご意見・ご感想を募集しています。  
 内容・分量・書式は問いませんので、お気軽にお寄せ下さい。  
 編集部一同、お待ちしております。

次号No.170は2026年4月末発行予定です。  
 原稿は4月10日までにお寄せ下さい。

FIELD NOTE  
フィールドノート  
2026. 1. 31 No. 169

---

発行：WMO／（株）野生動物保護管理事務所  
〒192-0031 東京都八王子市小宮町922-7  
TEL 042-649-1385 FAX 042-649-1386  
URL <https://wmo.co.jp/>  
E-mail [WMO\\_fn@wmo.co.jp](mailto:WMO_fn@wmo.co.jp)  
発行責任者：奥村忠誠  
編集：『FIELD NOTE』編集部  
郵便振替：00140-4-63739 年会費：¥2,000

---

無断転載を禁ずる